

(6) 「三日目に死人のうちよりよみがえり」

村上 伸

ヨナ書 2 章 1 節-3 節

マルコによる福音書 16 章 1 節-8 節

イエスの復活に関する最古の資料は、コリントの信徒への第一の手紙 15 章 3-6 節と、マルコによる福音書 16 章 1-8 節です。

前者は、パウロ自身も「受けたもの」と言っておりますように、さらに古くからの伝承と考えられます。記憶しやすいように韻を踏んで書かれた、詩のように短いもので、「わたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、三日目に復活したこと、・・・に現れたこと」と書いてあるに過ぎません。これに対して後者は「空虚な墓」に関するややまとまった記事です。

これら二つの、最古の復活資料には、いくつかの共通点が見出されます。それらを知ることが、私たちにとって決してどうでもよいことではありません。なぜなら、初代のキリスト教徒たちがイエスの復活をどのようなものとして信じていたのかということは、私たちの信仰にとっても重要な意味を持っているからです。

「いくつかの共通点」と申しましたが、二つにしばってみます。

第一は、イエスの死が確認されている、ということでしょう。コリント書の方は、「死んで葬られ」という言葉の後に、「聖書に書いてあるとおり」という一種の休止符を置いて、「三日目に」と続けています。「三日目に」というのは、ユダヤ教伝来の信仰においては「神の救いの確実性」を示す用語ですが、人間的に見るならば、死亡が確認されてから取り戻すこともできないような時間が既に経過してしまったことを意味しています。

マルコは、イエスの「死体」に油を塗ろうとして「墓に」行った女性たちについて述べています。死亡宣告がなされた直後なら、まだ温かい体に取りすがって名を呼んだり、命を呼び戻そうと泣き叫んだりもしたでしょう。しかし、その段階はとうに過ぎて、「三日目に」なっていました。彼女たちは、「イエスが死んでしまった」という事実を、今では動かし難い現実として冷静に受け止めています。「油を塗るために墓に行った」のは、いわば彼女たちの「涙が涸れた後の冷静さ」を示すものと考えられます。

第二の共通点は、今述べたこととも関連しますが、復活は決して蘇生ではないということです。蘇生とは、「死んだと思ったが実はまだ死んではいなかった」ということであり、「仮死状態にあった人が息を吹き返す」ことです。最近では、「臨死体験」についての注目すべき報告がいくつももたらされ、人間というものを幅広く理解するための貴重な手がかりを提供していますが、こういうことも「蘇生」であって、復活ではありません。そして「蘇生」は、人間の肉体的可能性の一つと言ってもいい。それほど不思議なことでもないのです。

しかし、臨死状態から蘇生した人も、いつかは本当に死ななければなりません。この点から見てもイエスの復活が「蘇生」ではないということは、明らかです。先に挙げた二つの資料もそのことを示しています。

それでは、イエスの復活とは何か。コリント書は、イエスが「現れた」ことについて繰り返し語っています。その現れ方は、例えば「五百人以上の兄弟たちに同時に現れた」(6節)とあるように、主観的な幻想と決めつけるには余りに現れた範囲が広く、同時性もあって、ある意味では客観的な出来事と言ってもいい位です。おそらくパウロも、この経験が主観的な「思いこみ」といったたぐいのことではないと主張しているのではないのでしょうか。

このことは、少し後になってから書かれた福音書にも見られる特徴です。

ルカが「エマオ途上のキリスト」という物語の中で印象的に描いていることも、結局は同じことを言っていると思います。復活のイエスは弟子たちと一緒に歩きながら語り合い、宿屋に泊まって食事を共にします。そのことによって、復活が幻でも空想でもないということが示される。

ヨハネ福音書では、復活したイエスが疑うトマスに手とわき腹の傷を見せます。イエスは復活して今も生きている。そのことが単なる観念でも幻想でもなく、現実として信じられているのです。

しかし他方では、復活という現実とは、私たちが見たり聞いたりしているもろもろの現実とは決して同じレベルのものではなく、むしろ、根本的に別の意味における現実であるということが主張されています。そのことを言うために、ヨハネ福音書はイエスが「鍵がかけてあった」(20,19)部屋にすーっと入って来たと述べ、ルカ福音書も、食事をしていたイエスが突然「見えなくなった」(24,31)と語っているのです。「イエスの復活とは、私たちが日常体験する現実とは違う、信仰的な現実です。「信仰的な」といっても、それは独りよがりの思いこみということではありません。もしそんなものに過ぎないとすれば、イエスの死後二千年たった今でもこの信仰によって生かされ、彼の生き方に従って愛のために奉仕しようとする人々が世界中で跡を絶たないという事実を、どう説明できるのでしょうか。

使徒信条は、十字架につけられ・死んで葬られ・陰府にくだったイエスが、「三日目に死人のうちよりよみがえった」と告白します。

私たち一人一人の人間と全く同じように人生の苦しみと死の現実を完全に味わわれたイエスが、そのことによって滅びたのではなく、三日目に死に打ち勝ったと信じるのです。

これは同時に、私たちの将来を指し示しています。彼が復活したと信じることは、私たちもまた復活すると信じることです。イエスの復活は、私たちの復活の先取りです。このことを、詩人の八木重吉はこう歌いました。

「きりすと
われによみがえれば
よみがえりにあたいするもの
すべていのちをふきかえしゆくなり
うらぶれはてしわれなりしかど
あたいなき
すぎこしかたにはあらじとおもう」

この事態を極めて印象深い言葉で語っているのがマルコです。白い衣を着た若者が、「あの方はここ（墓の中）にはおられない」と言った後、復活したイエスは「あなたがたより先にガリラヤへ行かれる」（7 節）と告げます。復活したイエスの居場所はそこだ、そこ以外ではない、というのです。

ガリラヤとは、エルサレムから遠く離れた辺境の地であり、昔から「異邦人のガリラヤ」・「暗闇」「死の陰の地」（マタイ 4,15）などと呼ばれていたところでした。しかし、そこは同時に、イエスが「神の国は近づいた」という福音を宣教し始めたところでもあります。

イエスはこのガリラヤで、貧しさや病気や差別に苦しむ人々と共に彼の人生を始めたのであり、そこが彼の本来いるべき場所だ、復活したイエスはそこへ帰ったのだ、というのです。彼は、あなたがたより先にそこへ行き、そこで彼の生涯の業が継続される！あなたがたも、そこで彼に「お目にかかれる」。

これが、先程申しました「現実」という言葉の意味です。イエスは、死んで墓に納められ、空しく朽ち果てるような方ではない。ガリラヤで生き続ける。だから、私たちも彼に従って生きて行く時に、彼に会える。その中で、彼が今も生きておられるという現実を、理屈ではなく、体で経験することになるでしょう。

（日本基督教団みくに伝道所 1997 年 1 月 19 日 礼拝説教）